

ぶらり文学散歩

岡本綺堂編

案内人：勝野 美葉子・Philo



文豪の愛した地として語られる修善寺温泉。

地元住民が案内人となり、

それぞれの目線から修善寺温泉界隈を紹介します。

岡

本綺堂は、明治時代に活躍した劇作家、小説家です。綺堂の出世作であり、新歌舞伎の代表作としても知られているのが、『修禪寺物語』です。

鎌倉時代の修善寺を舞台に繰り広げられる1幕3場の戯曲（演劇の脚本）で、修善寺に幽閉され非業の最期を遂げた鎌倉幕府の2代将軍・源頼家と、頼家からお面を作るように依頼された面作者・夜叉王とその娘たちの物語です。

修禪寺物語は、1911年（明治44年）1月に発表され、同年5月に2代目市川左團次の夜叉王にて初演を迎えます。その後、高島屋市川左團次家のお家芸として、「番町皿屋敷」などと並び「杏花戯曲十種」に加えられることとなります。

史上初の歌舞伎の海外興行でも上演された他、1927年には、パリ・シャンゼリゼ劇場でフランス人の俳優によって上演されました。上演には、パリ在住の日本人たちの協力もあり、舞台背景や公演のパンフレットは藤田嗣治がデザインを手がけました。

後に綺堂自らの手で小説化され、何度か映画やテレビドラマ化もされました。さらに、綺堂の作品を原作とした清水脩作曲のオペラ『修禪寺物語』は、團伊玖磨作曲の『夕鶴』と並び、戦後日本の創作オペラの先駆けともなりました。これら一連の大ヒットにより、修善寺温泉の名が全国に広がることとなりました。



▲明治44年の明治座での公演の様子。右から、市川左升の備、市川左團次の夜叉王、市川市十郎の春彦、市川壽藏のかつら、市川莚若の楓（安部豊編『舞台之華』、演芸画報社、大正11。国立国会図書館デジタルコレクション）

執筆のきっかけとなったのは1908年（明治41年）、修善寺温泉での滞在中のこと。その時の様子は、随筆集『猫やなぎ』に書き残されています。

私はこゝへ来てから指月ヶ岡にある頼家の墓には二度参詣して、笹龍膽の紋を染めた小さい幕の紫の色がや、褪めか、つてゐるのを寂しく眺めながら、薄命な源氏の貴公子のむかしを忍んだこともあるので、その面と頼家とを結びつけて色々の想像や感慨に耽つた。

（略）

どんな人がどんなところで彼の面を作つて、どういふ人の手を経て頼家の手に渡つたか、そんなことを考へてゐるうちに、職人畫の繪にあるやうな昔の職人の姿がわたしの眼の前にうかび出した。

創作のきっかけとなった「頼家の面」は現存しており、夜叉王の衣装や小道具と合わせて、修禪寺に併設する宝物殿に展示されています。

「頼家の墓」は、修善寺温泉街南側の丘の上に位置しています。正面には、「征夷大將軍左源頼家尊靈」と刻まれた供養碑が建っています。これは、1704年（元禄16年）に当時の修禪寺住職・筏山智船が頼家の500周忌にあたり建

うちっちのくらし便り

Small news from our everyday life



今年5月半ば、修善寺温泉場の入口に、アートやクラフトをテーマにしたギャラリー&ショップ「gallery kankō」をプレ・オープンしました。観光地に位置していることが、今後様々な意味を帯びてくるだろうと考え、店名にはあえて「観光」という言葉をそのまま用いています。

店舗は約一年をかけて解体から始まり、空間のデザインや施工のほとんど全てを自身の手で行いました。現在は、実際に訪れてくれる方々からのアイデアを参考にしながら、ランド・オープンに向けてさらなるデザインの試行錯誤を重ねています。



6月の朝、小山町のあたりを歩いていたところ、ツンとした酢の香りが鼻先を掠めました。その正体は丸屋青果店さんのらっきょう漬け。かつて修善寺温泉場の名物土産でしたが、もう閉業されて久しく……懐かしい香りに小学生の頃が思い出されました。当時は店内にずらりと瓶詰めのらっきょうが並び、圧巻だったのをよく覚えています。思わず作業中のご夫婦に声をかけお喋りをしてから出勤しました。



勝野 美葉子

修善寺燕舎の店主・デザイナー。オリジナルデザインのお土産制作やイベントの企画運営など、様々な活動に取り組んでいます。
X: @miyokokatsuno

ギャラリーでは、店舗の成り立ちを紹介するため、店舗づくりの過程そのものを展示しています。またショップでは、店舗づくりの過程で出た端材をアップサイクルした商品や、自身で集めたものを並べています。

今年の秋頃には作業を一段落させ、商品の充実を図りつつ、新たな展示とともにランド・オープンを予定しています。

現在は営業日が限られていますが、変化し続ける空間の様子を、ぜひ見にいらしてください。



細道 航

gallery kankō 店主。

現在の営業日は日・月曜日など（不定期）。これまで、現代美術の展覧会の企画や設営、執筆、編集などを行ってきました。

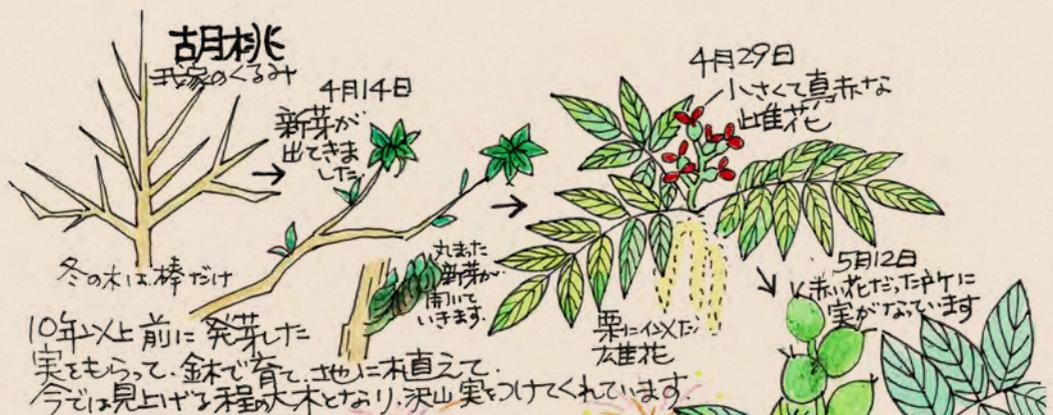


カエルシーズン、楽しんでますか？アマガエル、カジカガエル、シュレーゲルアオガエル、ツチガエル……身近なカエルだけでも意外と鳴き声が変わります。先日、伊豆市矢熊にて田んぼアートの田植えを行いました。地域のみなさんとの交流や沢山の可愛いアマガエルとの出会い。最高でした！ぜひGoogle マップで「伊豆田んぼアート」と検索してみてください！稲とオタマジャクシの成長が楽しみです。



木村 葵 (M+A 主宰/ 大学職員)

修善寺瓜生野出身のカエル愛好家。大学では風景計画専攻。伊豆あるく部で不定期フィールドワークを行う。



古月桃

我家のくすみ

4月14日

新芽が
出てきました

4月29日

小さくて真っ赤な
雌雄花

5月12日

赤い花の下で、下中に
実がなっています

10年以上前に発芽した
実をもらって、金木で育て、地植えに直して、
今では見上げる程の大木となり、深山実をつけてくれています。

藍 毎年種から

育て、夏に
主葉染を染めます。

花火大会

8月18・19・20日
土肥マナーフェスティバル
海辺に座って見上げる
海上花火。ラストの空射イガ
は、圧巻です!!

もう30年以上毎年、福寿草、
泊まり、家族と友人と楽しんでます。
毎回ラストでは必ず「わ〜っ!!!」
と叫んで、拍手喝采です。

8月21日は弘法大師奉納花火大会

修善寺温泉街で行われる花火大会
こちらのラストは「桂川へるりやとく」
タイプがうです。



3~4月
種まき

9~10月
花が咲きます

7~8月
大木が育ちます

葉だけを集めて、染めると
紺色とちがう。キレイな
空色が染まります。

リョウソウ 縹紅草

「かぶいし」とラバロウ
書いて、びんに入れて種を
まいたら、カワイヒカ
味持ちます。

二品種の
四季咲き

別名
南瓜 朝顔
カボチャアサガオ



省瓜 スズメウリ

母の庭からもらった
種から育てています。
実は緑から赤へ変色して、
模様が、手描きのように素朴でカワイイ。



庭の畑が
被害甚大!!!

アヒモクモ
とでも育てて
一夜にし
ボロボロなの
です...

緑味で
茶色、茶系の
色染めると
めると
かま
ます。

ゴメン
T=バ
ちやち

このコーナーでは、修善寺温泉の美しい景観や独自性のある建築を守り残していくために、丁寧に見つめ、記録していきます。

花小道

建築景観デザイン M+A 山田実加・木村葵

修善寺温泉と聞くと、修禪寺前の虎渓橋と独鈷の湯、そして桂川沿いに建つ歴史ある建物「花小道」の情景が想起される方も多いのではないだろうか。

遊覧通りに面した花小道の玄関から廊下を抜けると、平安時代の寝殿造の様式を取り入れているという縁側のある中庭が見えてきます。階段や廊下などのパブリックな動線を内側に配し、客室は桂川に面するように配置されています。その川沿いの客室棟こそ、虎渓橋から見る修善寺温泉の象徴的景観の重要な構成要素です。

花小道はかつて、仲田屋という旅館でした。明治10年（1877年）創業の仲田屋の建物は、大正初期の火事で消失したと思われ、大正13年（1924年）に建て替えられています。その後、改修を経て平成10年（1998年）に旅館「花小道」を開業しました。大正時代に建て

られた建築をベースに、現在に至るまで幾度も手が加えられています。



▲中庭。正面一階の談話室は藤原時代の様式を模しているという。

高度経済成長期には、ほかの観光地と同じように団体旅行や新婚旅行で大いに賑わいました。仲田屋ではその需要に応えるために、当時主流であった風呂・トイレ付きの客室や、宴会ができる大広間の設置など、大規模な増築と改修を実施しました。増築された棟には15〜20の客室と大広間が設けられ、多くの宿泊客を迎え入れることになりました。その際に、大正期の川沿いの客室棟にも浴室が増築されることとなりました。



▲温泉場に回遊性をもたらしている遊覧通り。左に花小道。樹形の特徴的な松が迎える。平成の改修前は歩道まで塀が建ち狭く暗い通りだった。

こうした変遷は、建物の屋根の形状にも現れています。大正期の棟は「反り屋根」、昭和期の増築部分は「むくり屋根」で造られ、それぞれの時代に用いられた建築技術の違いが読み取れます。虎溪橋から最も奥に位置する、昭和期に建てられた棟には、むくり屋根を見ることができきます。

「反り」と「むくり」の特徴は、修善寺温泉街のさまざまな旅館でも見られるそうです。

館内で隣の棟からみる瓦は圧巻の迫力。さらに、指月殿までの道すがらに

ふり返って温泉街を見下ろす風景も必見です。経年変化により深みを増した屋根瓦の色がまだら模様となって表れ、花小道の大屋根の味わい深い表情を作り出しています。



▲指月殿から花小道の屋根を見下ろす。ここからでも屋根の反りとむくりを確認できる。

平成16年(2004年)に経営者が変わり、「花小道」と名を変えて再出発しました。

その際に、遊覧通り沿いへ、せり立つように増築されていた昭和期の客室と大広間の棟を解体し、道が広がるようにと、通りに面した歩道を整備しました。これにより観光客や地元住民の歩行空間が確保され、温泉街の回遊性が高まったことはもちろん、町全体の風通しを良くする契機になったと言えるでしょう。

あわせて、昭和期の増築に伴い各客室に設けられていた浴室も撤去され、大正

期の建物の姿へと近づける改修が進められました。



▲談話室。天井仕上げは屋久杉の一枚板が贅沢に使われている。



◀花小道内にある、修善寺そば処「四季紙」からは修善寺と独鈷の湯を眺められる。



乱歩の間。現在はタビオカドリリンク等を提供する「むすひ」の喫茶室として利用できる。▶

この改修方針について、現在の経営者である小森泰信氏へインタビューしたところ、「改める」のではなく、「復元」することを目指す姿勢を感じることができました。

風呂付き客室が当たり前の時代を見直し、あえて風呂のない客室を復活させた背景には、「温泉は大浴場で」というかつての宿泊体験への回帰がありました。これにより無理矢理付け足された増築部分を解体することができました。

また、大広間の棟を解体し、大正期から使われている仕切り可能な広間を活用しました。襖ふすまを閉じると個室として対応できる柔軟性も、日本古来からの建築の在り方のひとつです。

高度経済成長期のような人々で賑わっていた時代に改変した様々なものやことの一部は、無理につくられてしまったと言わざるを得ません。このまちの伝えていきたい文化は、土地の文脈やそこにいる人々により創出されてきたはずですが、外部や時代の要請に応えることによって喪失してしまうこともあります。

それらを見直し、伝統的な宿泊様式や地域固有の景観を守っていくための変わった勇氣を花小道から感じ取りました。



◀瓦には仲田屋の屋号。



約300年以上前に採金のために使われた鉱山臼で、「搗き臼（つぎうす）」と呼ばれに立つ、樹形じゅけいの美うつくしい今は松の根元まつのねもとを、と支たえている。▶

花小道は、仲田屋という歴史ある建築を受け継ぎながら、「まちの景観の一部としての在り方」「まちの中でどう在るべきか」を考え、原点に戻りながら手を加えていった修善寺の名建築のひとつです。

花小道

竣工：1924年（大正13年）/1998年（平成10年）改修

設計：不明

住所：静岡県伊豆市修善寺3465-1

施設内店舗：修善寺そば処 四季紙、むすび



山田 実加（M+A 主宰）

天城湯ヶ島出身。実家は湯ヶ島たつた。一級建築士。土地のなりたちや人の歴史が環境にあらわれてくる場所に感動します。伊豆はそんな場所がたくさんあるよね。



木村 葵（M+A 主宰/ 大学職員）

修善寺瓜生野出身のケアル愛好家。大学では風景計画専攻。伊豆あるく部で不定期フィールドワークを行う。



▲乱歩が好んで宿泊した「桜の間」。仕上げ材に桜を使っている。例年2月末から3月上旬にかけて開催される「女将の雛まつり」に合わせて一般公開がされている。